OUKA
Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | CLD児の学習意欲に関する一研究 : 家庭でのインタビュー調査から |
| Author(s) | 甲田, 菜津美 |
| Citation | 日本語・日本文化研究. 2016, 26, p. 168-179 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/59660 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# CLD 児の学習意欲に関する一研究
## ―家庭でのインタビュー調査から―

甲田菜津美

### 1. はじめに

総務省の調査によると、2015 年の日本国内の外国人世帯数は 1,047,943 世帯で全体の 1.8%である。また、2014 年の文部科学省調査によると、公立小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校に在籍する外国人児童生徒数は 73,289 人であり、2012 年度と比べると 1,744 人、2.4%増加している。そのうち、日本語指導を必要とする外国人児童生徒数は 29,198 人である。本研究では、このように多様な言語・文化背景を持つ子どもをカミンズ（2011）にならい、CLD 児（Culturally Linguistically Diverse Children）と呼ぶことにする[i]。

文部科学省によると、「日本語指導が必要な児童生徒」は、日本語で日常会話が十分にできない児童生徒、および、日常会話ができても、学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じており、日本語指導が必要な児童生徒をさすという。この判断は、各学校の教師に委ねられており、日本語が話せれば、教科学習で使用する日本語ができなくてもそれは、個人の学習能力だとみなされてしまう場合もあり、授業についていけなくなる CLD 児が後を絶たない。こうした現状から、日本語がわからないから授業についていけない環境や、「できない」というレッテルを貼られてしまうことが、CLD 児の学習意欲の低下を招きかねない。本稿では、CLD 児の教育を支えるものは学校現場だけではないことに注目したい。CLD 児だけでなく、子どもにとって家庭の存在は非常に大きなものであり、子どもの成長とは切り離せない学びの場である。そこで本稿では、CLD 児の中でも両親ともに外国籍の子どもの家庭に焦点を当て、CLD 児の学習意欲の変化の要因を、親へのインタビュー内容から探る。

### 2. 先行研究

#### 2.1 親の在り方に関する先行研究

本稿で対象とする児童は両親とは母語で話し、学校では日本語を使用するバイリンガルであるため、バイリンガル教育について中島（2016）をまず取り上げる。また、子どもの周囲にいる大人の在り方について言及している桜井（2014）を取りあげることとする。

バイリンガルについて中島（2016）は、バイリンガルの種類を聴解型バイリンガル、会話型バイリンガル、読み書き型バイリンガルの 3 種類に分け、会話面と認知・学力面に分けてバイリンガルの力を考える必要があるとし、母語の重要性をあげている。母語は子どもの社会性の発達、情緒面の発達、また、知能の発達のためにも必要不可欠なものである。親が自信をもって話せる母語で子どもに話しかけ、話し合いができることが子どもの

成長にとって非常に大事なことであると述べている。異言語環境の中、家庭で母語を育てる場合は、決して易しいものではなく親の在り方が関わってくるという。この際、親は子どもの立場に立って母語使用を促すストラテジーが必要で、①間違いに寛容であること、②モノリンガルの立場で非難しないこと、③しつけの一部としてことばを使い分けること、④親の偏見が子どもの偏見の元になること、⑤いい聞き役になること、⑥学習仲間と親のための情報網をもつこと、といった 6 つの点に留意する必要があるという。

また、桜井（2014）は、心理学の立場から親を含めた子どもの周囲の大人ができる、学習意欲の育て方について言及している。なかでも、有能感を育てるために、自信を持たせる重要点を 4 点列挙している。成功経験をもつこと、称賛すること、うまく期待すること、時には外的報酬を与えることである。

### 2.2　CLD 児の親を対象とした事例研究

宮崎（2014）では、親が対象ではないが、日本に住む多文化の子どもを対象に家庭内言語の使用実態について調査されている。子どもの成長と共に家庭言語が変化し、母語離れが進行するという結果であった。実態を調査したものであるため、親との関わりの大小については触れられていない。小田（2011）は言語少数派生徒の母親へのインタビューから、日本人支援者と父母とが協働で子どもの学習をケアしていくことによって子どもの持続的な学びを支援する在り方を考察している。第三者による母語支援に母親が関わることで子どもの持続的な学習を促したが、家庭内における教育状況や母親の子どもへの接触の変化などについては触れられていない。佐伯（2013）は、自身の移動する子どもの子育て経験をふり返った個人的語りを分析している。子どものことばの発達には、他者との関係性が関連しており、なかでも親子間で相互主体的にアイデンティティ形成を図る関係性が必要である。また、言葉の学びを支えるための適切な支援として、親の言語教育への関わり方を方法論として提示することには限界があると認識し、親子の双方向的な関係性を前提としてとらえる視点が必要である。さらに、親も子どもの言語教育に関わる実践者の一人としてとらえる必要があると結論付けている。

以上のように、CLD 児の家庭からみた言語の変化の事例研究はされているが、親の対応が子どもの言語能力にどう影響するのか、また家庭内における親の CLD 児への関わり度や家庭内教育を言及している実践研究は数少ない現状である。言語だけにとどまらず、CLD 児の親のどのような教育観が子どもの学習意欲に影響を与えているのかという点に関しては、佐伯（2013）で多少触れられているものの、ほとんどないのが現状である。

そこで本稿では、CLD 児が幼少期の頃より日本に住む両親ともに外国籍の家庭へのインタビューを行い、家庭での CLD 児の様子を両親の教育観に基づいて具体的に見ていく。また、親のインタビューと家庭外での子どもの観察を関連付け考察し、CLD 児の学習意欲や態度の変化の要因に探ることに意義があると考える。

## 3. 研究概要

### 3.1. 研究目的

日本で暮らす CLD 児の親へのインタビューを通して、日本に育つ CLD 児が親から受ける影響、および子どもの学習意欲の変化の要因を考察する。今後日本において増加すると考えられる CLD 児を持つ親であるが、その親の教育観が CLD 児に与える影響から、子の学習意欲の変化の要因を明らかにすることで、今後の CLD 児への学習支援の一助となることを目的とする。

### 3.2. 分析データ

筆者は、週に一回 18：00～20：00 まで開かれている、CLD 児童生徒対象のボランティア教室（以下、K 教室とする）でコーディネーターとして支援を行っている。K 教室に通う児童の大半が在籍する小学校は、全校生徒の約 4 割が CLD 児であるため、本教室に通う CLD 児の数は増加の一途である。

本稿では 2016 年 2 月に実施した、K 教室に通う CLD 児 A（当時小学 5 年生）の両親へのインタビューを主に用いる。A は 5 年生になってから、K 教室において学習に対する態度が積極的になり、自分のルーツについても積極的に話してくれるようになった。そこで、A の 5 年生になってからの変化の要因を家庭から探るため、インタビューを行うことにした。

インタビュー内容を補足するために、2014 年 10 月から 2016 年 7 月までの K 教室での筆者のフィールドノーツも用いる。なお、児童 A と筆者の関係は良好で、毎週 K 教室で、また小学校でも頻繁に顔を合わせ、活動を共にすることが多いため、信頼関係が築けている。

### 3.3. 分析方法

あらかじめ用意した質問用紙を基に、A の自宅にて主に父親へ半構造化インタビューを行った。質問事項の概要は、①A および父のこれまでの経歴、②親の希望や教育観、③A の学習に対する態度の変化、④A の興味関心についてである。インタビュー時間は約 40 分で、使用言語は日本語である。IC レコーダーで録音したインタビューは書き起こした後、内容を分類し、質的に分析していく。必要に応じて、インタビューの内容と関連する観察記録の内容を合わせて考察する。

### 3.4. 協力者のプロフィール

A は、インタビュー当時小学 5 年生であった。生後 1 歳で来日、父母共にインド出身で、母語はグジャラティー語である。兄弟はいない。日本の公立幼稚園、小学校に通う。また、A は筆者が通う CLD 児童生徒対象のボランティア教室に毎週通っている。家庭内言語は、グジャラティー語およびヒンディー語[ii]であるため、母語での会話は可能であるが、読み書

きはできない。父親とは日本語で話すこともあるが、母親とは日本語で話すことがほとんどない。インドへは長期休暇の際に家族で一時帰国することが多く、年に 2 回 2 週間ほど母国で親戚と過ごしている。親戚の中で A は最年少であり、親戚たちから可愛がられているという。

A の父は仕事の関係で 25 年前より日本とインドを行き来している、会話型バイリンガルである。A が 1 歳の時に家族そろって日本に移住した。A の母は専業主婦のため、ほとんど日本語を使用することがなく、父ほど日本語は話せないが、簡単な会話であれば日本語の使用が可能である。

## 4. 結果と分析

インタビュー内容を文字起こしした結果、表 1 の 8 項目に大別することができた。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | A の経歴 | 5 | A の自宅学習のようす |
| 2 | 母国について | 6 | A に生じた変化 |
| 3 | 親から A への信頼 | 7 | 父の教育観（自身の日本語習得経験から） |
| 4 | 親子間の希望 | 8 | A の興味・関心 |

【表 1　インタビュー内容分類】

1 の A の経歴については 3.4 でまとめたため、それ以外の項目を「親の考え」、「A について」の二種類に分類し、分析する。なお、会話における I はインタビュアー（筆者）を表している。

### 4.1. 親の考え

本節では、項目 3 と 4、5 と 7 について分析する。

#### 4.1.1 親の希望

父に A への希望を尋ねると、学校での成績と日本語に関する希望が出た。A にテストで高得点を取ってほしいため、いつも日本語を勉強するように言っているという。父は、A の高校進学を日本国内で考えているため、もっと日本語を勉強してほしいと考えている。

父 170：だから一応ね、日本で、小学校まで行ってるでしょ。だから中学校も日本語で、あとー、高校生までも、日本語ですごくうまく行けたら、いいなーと思ってますけど

また、母にも A への希望を聞いてみたところ「勉強」だと答え、その後父が母の母語を訳して述べた。

母 179：勉強（グジャラティー語で父に伝える）
父 180：まあ、あの、（母の名）は、勉強がすごくうまくなるように、考えてるんですけど。（母の名）のね、子どもやから一番最初の考え方はそういうこと。だって、一番あの勉強は、すごくうまくいったら、いろんなことああいうことできることなる。それは普通のあの、そういうことある。
I181　：すごく教育に、お父さんもお母さんも力入れていらっしゃるんですね

180 では、父が母の言葉を通訳している。勉強をがんばって成功することで、様々なことができるようになると母は考えている。以上から、両親ともに A の勉強に対する希望を抱いており、力を入れていることが分かった。桜井（2014：121）では、子どもの成長に期待することの重要性が述べられているが、ここで、父も母も A の学習に対する期待がうかが

える。

しかしこの内容を受け、A は父に対して、日本語の「書く」勉強をしてほしいという希望があると、A 自身が発言した。A は自分も頑張って勉強しているのだから、父も一緒に勉強してほしいという気持ちがあるのではないかと思われる。この A の父への希望が垣間見られたことは、インタビュー時に家族全員がそろっていたという利点であろう。

A への教育に関する質問をした際に、A 親子は計算が早いという話になった。普段の K 教室での A は算数の宿題で計算問題が出たとき、集中して誰よりも早く計算を終えている。以下の発話に注目したい。

父 116：そう、A はね、僕はね、私今ずーとみてるのは、A も、ちょ計算は早くできるはず、はやくできることになる。
A117 ：でも早いけど少し間違えることもある
父 118：それはね
I119 ：それはね
父 120：まだそんなに、勉強してないから。頭にまだいろいろ動いてるから

A は自分で計算を間違えることもあると消極的な発言をしているが、A の間違いについて父は寛容であることが 120 の発話からうかがえる。ここから母語使用時のみでなく、学習時においても中島（2016）のストラテジー「間違いに寛容である」ことが A の学習への動機づけになっている可能性が指摘できる。

また、父の発話で目立ったのが「believe」という言葉である。後述するが、A の父は A への教育に関して非常に熱心である。A が低学年の時、学校の成績が芳しくなかったことを受けて心配していたことがあったが、親として子どもを絶対に信じている、心配していない、と何度も口にしていた。

父 122：まあ A は今、学校のこと、勉強のことはね、今、半年から見てるのは、学校のこともちゃんとテストとかいろいろ前に比べたらすごくよくなってるなって見て、大丈夫やなーって。心配してたけど、心配してたのは英語の勉強やね。心配してたけど、でもね、私は、A のことは、絶対信じてるから、たぶんね、まあ英語の勉強はね、もうちょっと遅くてもできないことはない。
I123 ：そうですね
父 124：できるのはできるやから、でも今からちょっと家庭教師、英語もやってるし、しゅういっ、あ、二週間に一回のクラスで。
I125 ：そうなんですね
父 126：そうです。一か月にもう二回ぐらいしてるし。だから、それだけ心配してたけど、でも心配もうない。A のこと、僕今なにも心配してない
I127 ：そうなんですね
父 128：絶対あの、I believe.信じてるから

（下線は筆者による）

希望とは反対に、A に対する不安に対して質問すると「ない」と答え、A に信頼を置いている姿がみられた。

父 154：あとね、まあ、子どものことはね、ずーっとね、おっきくならないまで、自分で仕事、まあ、生きれるまではずっと心配あるのはあるけど、でも、私はね、A は。あの、頭はすごく早いんで、正直に言えば。目の前でいうのはどうか分からんけど。すごく早いんで、その辺はちょっと心配ない。将来のこと、future のことは、そんなに今は心配していない

親はいつまでたっても親であり、心配は尽きないが、父は A の頭の良さに信頼を置き、将来についてはそんなに心配していないという。

K 教室での A は、教室に到着すると必ず両親のいずれかに到着したという電話を入れる。また、どこかへ行くときは必ず親に伝えるようにしている。A は親の心配をかけない行動を自然にとっているため、父親も A を信じることができ、父親が信じてくれているため A も父に信頼を置くことができているのではないだろうか。

### 4.1.2. 父の教育観

半年前の小学校での懇談で国語の点数があまり芳しくないことについて担任から報告があり、家庭教師を始めたという。すぐに対策を打つという点に、前節で勉強に力を入れている両親の思いが現れている。それまでは低得点であったが、国語の勉強に力を入れたことにより、点数が上がったと A は述べたが、父はそれを訂正し、前回のテストの点数がそんなに良くなかったと指摘した。その指摘に対し、A は「今度は行けると思う」と積極的な回答を父にしていた。

（家庭教師の回数の話をしていて）
父 195：ああ、二週間に一回。だからもっとちょっと増やしたいから、最近話したらちょっと、増やした方がいいかな、一日もうちょっと増やしたい。なんでかっていうと本読みはないの
I196 ：あ！読まないんだ
父 197：読まないの、本読みできたらすごくうまくいけるよ
I198 ：今あの、子ども教室で、1 時間目宿題して、2 時間目本読む活動してるんですけど
父 199：え読んでる？読めてるの？
I200 ：がんばってますよ？
父 201：そう？

国語の点数がなかなか上がらない原因として、父から本を読まないという意見がでた。I198 の発言に、子ども教室とあるが、これは K 教室のことを指しており、2 時間目の本を読む活動とは、ボランティアと一対一で行う本読みを軸にした対話活動のことをさしている。K 教室での観察記録より、A はこの対話活動を嫌がる傾向にあることが指摘される。毎回 A は「面倒くさい」と言ってすべてボランティアに読ませようとする。父の発言から、家庭での読書がないことが明らかとなり、K 教室内での A の言動の理由が理解できた。

その後父は、自分の日本語学習歴から A への教育方針を語った。まず、発話 289 で、自分の経験を語った。A の父は、1991 年に初来日し、その後 5 年は日本語をなかなか習得できなかった。しかし、2004 年に定住することになり、日本語を様々な経験を通して習得していった。その苦労は人知れないものであろう。しかし、自分に「できる」と常に言い聞かせ、仕事などの経験から習得した日本語を駆使して父は会社を経営するようになった。そのため、子どもにも経験を通して何事も学んでいってほしいと考えている。その基盤となるものは現在通っている学校の教育だという。父は、人生すべてが経験であるが、今ある基盤を A にしっかり築かせようと心がけていることがわかった。父はまた、A のことについて「A は一回考えたらなんでもできるでしょ。できないことないから、だからその辺は僕、あの、絶対安全（安心）やから」とも述べている。その後、以下のようにまとめている。

父 291：すいません、そこまでは。だからね、そこは強くなっていくから、二番目は、次のことは後で考えるけど、できないことはないから心配ない

I292　：うん
父 293：すごく confidence はあるから、絶対。私のことと一緒。私もあのー、例えば仕事でも、心配は一切もない。どうしてもあきらめる人じゃないから

前節のとおり、A を信じる父であるが、父は自分が壁を乗り越えた経験から、A もきっとあきらめずにいればどんなことも乗り越えられるとまとめた。

また、休日には様々な場所へ親子で出かけ、経験を増やす努力をしているうえに、子どもの興味のあるものを存分に伸ばしている。さらに、子どもを叱ることや体罰を与えることはなく、どんなときも言い聞かせるように心がけているという。

A は、父の日本での経験を理解しており、父の言うことは素直に受け入れる。教室での課外活動への参加に対しては必ず父の許可を取ってから返答する様子が観察され、父に一目置いている傾向にある。A の両親が主体となって K 教室で調理実習を行ったとき、A は終始両親の手助けをし、満足げな表情でいた。このことからも、A と両親は良好な関係を築いているため、両親の期待に応えようと A は学習に対して積極的に取り組んでいるのではないかと考えられる。

### 4.2.　A について

本節では、項目 6、8 について分析する。3.2.でも述べたが、A に生じた変化および A の興味・関心については、筆者が A の家庭にインタビューする動機となった出来事である。

#### 4.2.1.　A に生じた変化

5 年生になってから A が変化してきたと父は語る。思考方法や話し方が成熟してきたように感じるという。その理由について父はわかっていなかったが、A 本人に聞いてみたところ、友人が増えたことが明らかとなった。

I235　：へー。え、それは、A、A！自分の中で何か変わったことがあるの？
A236　：なんやろ。あー成長っていうかなんか。1 年生から 4 年、4、3 年生まであまり友達がいなかったけど、4、5 年生ぐらいで少しめっちゃ友達できた。全員友達になった
I237　：そうなんやー
父 238：だから 4 年生まではね、ずっと文句あったのね、友達いないからちょっと不安になってたけど、最近そういう文句はないから、すごくいいかなーと思って
I239　：へーそっかー、友達が、増えたんですね、よかったねー
父 240：友達も増えたし
I241　：しかも、中学生のお兄ちゃんとかと、よくね、火曜日、あのーだれやっけ J か
A242　：J
I243　：J とかな、すごく仲良くしてくれてて、お兄ちゃんがね
父 244：だから 4 年生はね、すごく不安に、時々帰ってから、゜お父さん、友達いない゜って。で私一回先生にもう一回二回ちょっと言ってたね
I245　：そうなんですね
父 246：先生、ちょっと A、友達いないから、すごくあの、あれなってる[iii]って言うてたけど、まあでも、5 年生は、だんだん、だから僕さっき言うたでしょ、5 年生は全然変わってきた

4 年生まで友達がなかなかできなかったことが A の中で悩みとしてあったようである。244 の父の発話から、A が「友達がいない」と言える家庭内環境があったことが分かるが、これは、CLD 児にとっては家庭に居場所があったことがわかる。学校で友人がいなくとも、家庭で受け入れられているという安心感があることで、A はたとえ 4 年生まで友人ができ

なくとも頑張れたと考えられる。しかし、5 年生になり、友人ができたことで学校内にも A の居場所が確立されてきた。ちょうど、4 年生の頃から A は K 教室に通い始め、様々なルーツを持つ子どもたちという他者との交流が増えた。この交流が A に「新たな視点をもたらし、「学習」の新たな意味に気づかせ」た（齋藤・佐藤 2009：254）と考えられる。さらに、I241 にもあるように中学生の CLD 生徒とも仲良くする様子が観察されている。また、機嫌を損ねた年少者に気を遣う様子も 5 年生に入り観察されるようになり、周囲の人間との関係を捉えられるようにもなってきていると考えられる。

父もまた、学校や地域に友人がいることはいいことであると次のように語っている。

I 256：そうなんや。へー。じゃともだち大事ですね
父 257：そうです。やっぱり、こどもはみんなそう。友達は大事やから
I 258：そうですね。えっと
父 259：だってね、家の中から、何かあって、たとえばお父さんとかお母さんから何かおこったりとか、強めで言いたいとき、でていったら、ちょっと学校行ったらいいことある友達あるからいいなてそういう気持ちが変わってくるから、それはすごくいいなーと

259 で父は、家庭内で両親に叱られた際に一人で悩むのではなく、学校の友人と会い、話し、遊ぶことで気分転換ができることがいいことであると述べ、友人の大切さを確認している。

### 4.2.2. A の興味・関心

筆者はよく A と対話学習活動を K 教室で行うのだが、その際に A の知識の偏りに疑問を持っていた。物語文など心情を考える際には、言葉数が少なくなるのだが、航空や地学関係になると、小学校 5 年生とは思えないような豊富な知識で仕組みを丁寧に説明する。特に、将来は飛行機のパイロットになりたいとよく口にしていた。そこで、A の知識の情報源、および動機について父に尋ねてみた。

I312　：あと、一つ私いつもすごく気になることがあって、
父 313：はいどうぞ
I314　：A ね、すっごい知識があるんですよ。
A315　：ん？
I316　：あの、ロケット、ロケットじゃない飛行機のこととか、地震とか。地震のこととか、なんでこんなにたくさん知ってるんですか？お父さん
A317　：テレビとか、勉強できることとか、インターネットでいろいろ
父 318：ゲームの中かも
A319　：ちゃうってー！
父 I320：(笑)
父 321：いや、それはほんと！それそういうことじゃない。A の文句の話じゃないよ
I322　：(笑)
父 323：たとえばゲームやってるけど、中からもいろんな言葉とか、あれいろいろちょっと考えて、頭に入れてるから、ゲームはあの、これもあの、飛行機のあれも、全部書いてる
I324　：見ていい？
父 325：ああ、いいいいいい。これ全部飛行機つくる前の、準備、こうやって
I326　：へーすごーい、え、A あれ自分で全部調べて書いたん？
A327　：いや、飛行機の将来の夢自分で作る

父は 323 で、A の部屋にあるホワイトボードを指さした。そこには A が作った簡単な飛行機の設計メモが書かれていた。A に調べた方法を聞いてみると、インターネットで調べて

いることが分かった。A の知識は、テレビやインターネットから自ら進んで勉強して習得していたことが 317 の発言から分かった。

幼少期の頃、A は電車が好きだったと父は語った。しかし成長し、いつの頃からか、飛行機の勉強を独自にするようになったという。その動機について、以下のように語った。

父 351：で、飛行機のはね、お母さんがね、ちょっと飛行機は、乗れないから
I352　：え、そうなんですか！？
母 353：怖い私
父 354：怖い、心配してるから
母 355：乗らない
I356　：え、じゃあインドに帰るときは
母 357：ん乗る？
I358　：乗るんですね
A359　：インドに帰るときは乗るけど、ほかの国
父 360：゜持ちないといけない゜こうやって持っておかないといけない
母 361：うんーちょっとびっくりしてる
父 362：ちょっとすぐ落ちちゃう落ちちゃうて、気分が、そういう、なってるからだからそれ見て、ちょっとね、お母さんが、心配ないようの飛行機つくりますーって

ここで、A のパイロットになりたいという夢の動機が母の恐怖症であるということが明らかになった。母が心配せずに乗ることができる飛行機の開発がしたいために飛行機について調べ、また自分で飛行機を作り、運転したいという夢があることが分かった。母との関係が良好であるからこそのモチベーションであろう。このことから、家庭環境が子どもの自主的な学習を引き出す要因となることがうかがえる。

インターネットの話から、A がテレビも好きだということが分かった。A の家では、朝は日本のテレビ番組、夜はインドのテレビ番組を見るという。実際にインタビュー実施後もインドのテレビ番組が放映されており、A は話の内容を筆者に教えていた。母語のインプットが両親からのみでなく、テレビという媒体からも行われていることが、A の母語保持に影響を与えていることがわかった。

また、A の家庭は敬虔なヒンドゥー教で、ベジタリアンの家庭である。そのため、小学校での給食は食べずに弁当持参である。フィールドノーツより、A が弁当を持ってきていることに対して、クラスメイトは快く受け入れており、A 自身も他の物を食べたくなることはなく、みんなにも動物を大事にしてほしいとも言う。インタビュー終了後、父からの提案で家にあるお祈りスペースを見せてもらった。父は、A が毎朝、特にテストの日はきちんとお祈りをしていくと言う。一緒にいた A はそこに置かれている道具のそれぞれを丁寧に説明してくれた。A にとって家族の宗教は自分の一部であり、大切にしようという心がある。

## 5. 考察

インタビュー分析の結果、家庭が CLD 児に与える影響の正の要因について明らかになったことをまとめてみる。まずは、CLD 児を「信頼」し、「期待」しているという点である。親が子どもを積極的に信頼しているのであれば、子どももその積極的な信頼に応えようと前向きにはたらくのではないだろうか。A の家庭の場合、両親は A に勉強を頑張ってほし

い、A は頭の回転が早いできる子だと適度な「期待」（桜井 2014 : 121）をしている。その期待が、A の学習意欲を高めているのではないだろうか。親からの温かい信頼と期待があることで、自主的に A は母親の苦手とする飛行機について調べ、将来の夢を大きく描き、そのために知識をつけるという正のサイクルが発生していた。

A の父自身が異国の地で言語を身につけ、成功しているという経験があり、A もその姿を見ている。さらに父は A にもいろいろな経験をさせようと努力もしている。父親という身近なロールモデルがいることで、まだ幼い A ではあるが希望を見いだせているのではないだろうか。また、父は A の計算の間違いに対して、咎めるのではなく今後の成長につながると考え、「間違いに寛容」（中島 2016 : 87）である。間違いから改善する環境があることが CLD 児の学習意欲を向上させるのではないであろうか。また、インタビュー中、父母ともに、A に言い聞かせる場面で母語を使用することが複数回あった。「しつけの一部としての言葉の使い分け」（中島 2016 : 88）を自然に行っていることが示唆される。

一方で、A の母語のリテラシー力は現段階では低く、聴解型バイリンガルである。父の発話から家庭内での読書の時間がないことが明らかになった。読書の必要性はさまざまな先行研究で述べられているが、A の場合文字情報がない。真嶋他（2013）では、テレビの字幕が児童 K の識字能力の獲得につながることも示唆されている。A は母語でテレビをよく見ているため、聴解に関しては常にインプットが親以外からもあるが、K のようには文字情報のインプットがない。しかし、まずは学習言語である日本語を身に着けてから長い目でみて母語を獲得してほしいという父の思いがある。インタビュー中の A の発言で、一度に二つのことができないから、まずは学校で必要な日本語を勉強し、その後で母語のリテラシーを学びたいという意思が示された。母語の識字能力の育成は抽象的思考において欠かせないものである。ただし、A の場合幼少期から日本で育ち、日本での進学が念頭にある。家庭内での母語での会話は支障がなく、両親ともに自分が自信をもって話せる言語で子どもと話し合いができている様子であった。母語保持のためにも今後の家庭でのリテラシー教育に注目していきたい。

家庭内環境とは直接的に関係は少ないが、A の学習意欲の変化の要因として「友人」の存在が A の精神的な成長も促していることが分かった。A の父だけでなく、週に一回しか接さない筆者も気づくほど、A の思考や話し方、態度が成長していた。その要因が「友人」が増えたことにあった。4 年生までの A は友達が少なく、父が学校に相談に行くほどであったが、5 年生になり、クラスの仲間と良好な関係が築けるようになったという。また、ボランティア教室に通うようになったことで、様々なルーツをもつ仲間との交流も増えた。家庭外における身近な人間関係も CLD 児に大きな影響を与えると推察された。

## 6. おわりに

本稿では、外国人児童の家庭においてインタビューを実施し、子どもの学習意欲の変化の

要因を、家庭が与える影響から考察した。家庭内言語と家庭外での言語が異なる中、親が子に与える影響は非常に大きなものがあり、今後子どものアイデンティティにもかかわってくるものであろう。親が子どもを信じ、ロールモデルとなることで異文化環境に生きる子どもの学習の姿勢や積極性に影響を与えることが理解できた。また、家庭の関係だけでなく、学校での友人関係の良好性が子どもの学習意欲に与える影響の大きさが本人の発言により、明らかとなった。

親が子に大きな影響を与えることは、言うまでもないことである。今回のインタビュー調査は A の事例にすぎず、しかも限られた時間であったため一般化はできないが、異文化に生きる CLD 児 A にとって、自主的に学習し心を開いていく要因として親の考えの重要性が明らかになった。長い目で子どもを信じて見守る親の在り方が CLD 児のアイデンティティ形成や学習意欲や学習態度に正の影響を与える一因であるということがみられた。今回見られた親の在り方は、今後増加すると考えられる外国人世帯や海外に移住する日本人世帯の教育支援への一助となるのではないだろうか。今後、CLD 児の学習意欲の変化の要因を生かした学習支援の在り方の考察が必要であるが、これについては別稿に譲りたい。

**参考文献**

石田靖彦・吉田俊和（2015）「友人との関係の親密さと友人の特徴が生徒の学習動機づけに及ぼす影響」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』（5） pp.133-140

小田珠生（2011）「言語少数派生徒のための「父母と協働の持続型ケアモデル」の可能性―：母親に対するインタビュー調査から」『言語文化と日本語教育』（42） pp.1-10

カミンズ、ジム・中島和子（2011）『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版会

齋藤ひろみ・佐藤郡衛（2009）『文化間移動をする子どもたちの学び　教育コミュニティの創造に向けて』ひつじ書房

佐伯なつの（2013）「「移動する子ども」のことばの発達をめぐる親子の物語」『「移動する子ども」という記憶と力』くろしお出版 pp.194-219

桜井茂男（2014）『学習意欲の心理学　自ら学ぶ子どもを育てる』誠信書房

総務省（2015）「住民基本台帳に基づく人口、人口動態および世帯数」http://www.soumu.go.jp/main_content/000366458.pdf

中島和子（2016）『完全改訂版バイリンガル教育の方法』アルク

真嶋潤子・櫻井千穂・孫成志（2013）「日本で育つ CLD 児における二言語のアイデンティティの発達―中国語母語話者児童 K 児の縦断研究より―」『日本語・日本文化研究』（23） pp.16-36

宮崎幸江（2014）「多文化の子どもの家庭における言語使用と言語意義」『上智大学短期大学部紀要』（34） pp.117-135

文部科学省（2014）「「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成 26

年度）」の結果について」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/__icsFiles/afieldfile/2015/06/26/1357044_01_1.pdf

---

[i]CLD 児には外国籍のみでなく日本国籍の子どもも含まれる。他に、渡日生や外国にルーツを持つ子ども、サードカルチャーキッズなど、多くの呼び方がなされている。

[ii] テレビ番組は主にヒンディー語で見ているが、親との会話は主にグジャラティー語である。しかし A の 2 言語能力の詳細については不明である。

[iii] 「あれなってる」と言った際に父は顔をしかめていた。正確な意味は不明であるが、父 244 で発話されている「不安」を表しているのではないかと考えられる。